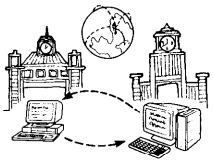
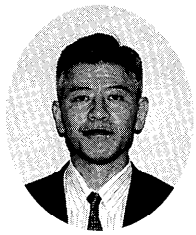
巻頭言



情報処理学会論文誌の出版電子化



池田 克夫†

電子出版技術の発展がめざましい．CD-ROMによる新しいジャンルの出版も珍しいものではなくなった．さらに，従来の冊子体の出版からネットワーク型の情報流通へと，情報流通の形態の変化も既に始まっている．WWWによる情報サービスはあっと言う間にコンピュータネットワークとは無関係と思われたような分野にまで広まっている．情報処理学会においても学会の各種管理業務の電子化が本格的に図られ，機関誌の出版電子化や情報発信についての議論も始まっている．論文誌の原稿は，本年7月から，LaTeX化することにした．実際に電子入稿された論文によって論文誌が発行されるのは10月以降になる見込みであるが，ようやく情報発信の電子化の第一歩のスタートができたのである．ここに至る過程における関係者の努力を多としなければならない．

言うまでもなく論文誌，あるいは研究会や大会の資料などは会員の研究の成果を広く世の中に発表するためのものであるから，情報がいかに広く迅速にアクセスされるかを第一義として考えるべきであろう．この意味からは，ACMが行っているように，非営利目的利用に対しては，自由に掲載論文の複写を認めてもよいと考えられる．また，WWWによる情報発信についても学会として真っ先に取り上げて実行すべきものであろう．

学会誌の記事を同列に考えることができるかどうかは議論のあるところではある．これには学会の会員であることにどのような意味があるかということと関係するかもしれない．いずれにせよ情報処理に関する学術と技術に関する専門学会である情報処理学会としては，版権や著作権など，これからのマルチメディア時代の大きな問題を避けるのではなく真っ先に体験しながら，情報化社会のあるべき姿を探ってゆくことが大きな使命ではないかと思われる．紺屋の白袴とか船頭多くして船川を渡らずとか言われたくはない．

出版電子化に関しては，出版の期間短縮および電子的配布に加えて出版経費が関係する．論文誌の購読料は論文誌として発刊された1979年から一度も改訂されたことがない．しかし論文誌の1巻のページ数は'79年529ページで始まり'84年（1107ページ）から'92年（1657ページ）までは1000ページ台であったものが，'93年（'93年2635ページ，'94年2841ページ）から鰻上りに増加しており今年は3200ページにもなると見られている．このことは情報関係の研究が順調に進められていることを示し，誠に喜ばしい限りである．しかし，編集印刷関係の諸経費および送料はこれまで値上がりする一方であった．その結果この数年来論文誌発行経費は大きな赤字となって学会財務に負担をかけている．この度の出版電子化により，編集並びに版下作成経費節減の効果が期待されるが，この分は購読者に還元するべき性格のものではない．学会，投稿者，購読者のそれぞれにおいて，どのような根拠に基づいて論文誌の発行経費を負担すべきかの検討が残されている．また，CD-ROM化による印刷および郵送経費の削減についても今後の課題である．

会員諸氏のお考えをよく承り，ご協力ご支援を賜りながら，時代の要請にマッチした学会づくりおよび学会からの情報発信を図ってゆきたいと念じている．

（平成7年5月29日）

† 本会論文誌担当理事　京都大学